

発達障がい児の余暇支援活動に関する実践研究

ーありのままの自分が認められ、安心できる居場所づくりー

平成30年度地域課題解決プログラム

三田地つぐみ（教育学部特別支援教育コース）

指導教員：佐々木 全（岩手大学教育学部 准教授）

奥野 雅子（岩手大学人文社会科学部 准教授）

課題申請者：折本 美祐子（子どもの居場所あえりあ 代表）

1. 課題

発達障害のある児童生徒は、学校・地域・家庭それぞれの適応について課題となる場合がある。それを補完すべく、親の会等の市民活動団体による活動の場が提供されることがある。

そこでは、対象である児童生徒について、個々の学習上の困難さ、行動上の困難さ、対人関係上の困難さなどの実態を適切に理解し、対応することが求められる。

発達障害のある児童生徒に対する市民活動団体による実践は数多あるが、個別のニーズに適合するかどうか重要である。

その一団体である「子どもの居場所あえりあ」では、放課後・休日の学習の場を提供し、上記のニーズに応えるべく、心理の専門職にある申請者(折本)が代表を務め、特別支援教育等を学ぶ学生ボランティアを組織化し、学習支援活動を実施する。

なお、「子どもの居場所あえりあ」が活動の拠点とする盛岡近隣においてもいくつかの事例がある(佐々木、2016；2017；2018)が、学習支援を柱にするものは見当たらない。「子どもの居場所あえりあ」が先導的な事例となるだろう。

2. 研究の目的と方法

児童生徒にとって
の成果を検証し、
実践的な意義を明
らかにすること

対象とする子どもの学習、行動、対人関係における特性を把握しそれに適合するような支援を開発、検討する。

対象の児童生徒における活動に対するフィードバックをアンケート等で求めその内容について分析をする。

持続可能な運営体
制としてその内容
と方法を開発する
こと

・ ・ スタッフによる運営に関する自己評価をアンケートやインタビューによって求めその内容について分析し、運営体制の検討を行う。

3. 結果 (1) 実践の概要

	実施回数 (平日：休日)	延べ参加者数 (子ども：スタッフ)	1回平均参加者数
2018. 4－6.	6 (4：2) 回	28 (13：15) 名	4.6(2.1:2.5)名
2018. 7－8.	6 (4：2) 回	43 (23：20) 名	7.2(5.8:3.3)名
2018. 9－10.	4 (1：3) 回	13 (5：8) 名	3.6(1.3:2.0)名
2018. 11－ 2019. 1.	4 (3：1) 回	23 (13：10) 名	57(3.3：2.5)名
※2019. 1. 現在	合計 20(12:8)回	合計 104 (54：53) 名	5.2(2.6:2.6)名

※後に記す実践事例を含まない。

3. 結果 （2） 児童生徒にとっての成果

児童生徒にとっての成果を検証し、
実践的な意義を明らかにすること

- ・ 対象とする子どもの学習、行動、対人関係における特性を把握しそれに適合するような支援を開発、検討する。
- ・ 対象の児童生徒における活動に対するフィードバックをアンケート等で求めその内容について分析をする。
- ・ ※ここでは学習支援の実践を持って例示する。

3. 結果 （2） 児童生徒にとっての成果

1. 対象：発達障害のある中学生2名（AとB）

WISC－IVの合成得点プロフィール

対象生徒	全検査	言語理解	知覚推理	ワーキングメモリ	処理速度
A	64	64	82	63	70

対象生徒	全検査	言語理解	知覚推理	ワーキングメモリ	処理速度
B	66	66	67	82	78

2. 指導体制：支援員として大学生2名を配置した。原則として1～2ヶ月を1クールとし、毎週金曜日の18:30～20:00に計3クール学習支援活動を行った。市内のコミュニティセンターの一室を借用し、活動場所とした。

3. 指導内容：中学数学

3. 結果 (2) 児童生徒にとっての成果

クール	実施日	学習内容
1	(1)6月1日	分数と小数の乗法／自然数と整数
	(2)6月8日	分配法則／不等号／式の変形
	(3)6月15日	式の変形／1次方程式
	(4)6月22日	6月1日～15日のまとめ問題
	(5)6月29日	整数の四則計算
	(6)7月6日	分数の約分
	(7)7月13日	分数の通分

クール	実施日	学習内容
2	(1)8月24日	分数と小数の加法・減法
	(2)8月31日	分数と小数の加法・減法
	(3)9月7日	分数と小数の乗法・除法
	(4)9月14日	分数と小数の乗法・除法
	(5)9月21日	分数と小数の四則計算

クール	実施日	学習内容
3	(1)11月2日	整数・小数・分数の計算
	(2)11月16日	正負の数の四則計算
	(3)11月18日	分数の約分／正負の数の加法・減法／整数・小数・分数の計算

3. 結果 (2) 児童生徒にとっての成果

◎「自然数」とは・・・正の整数
→ プラスの数
・例えば、1、2、3、15、200 など
・0は入る？入らない？ → 入らない

◎「整数」とは・・・
→ 0とプラスとマイナスの数
・例えば、-320、-5、0、5、100 など

(1) 次の中で整数に○を付けてください。
-500、-0.5、0、 $\frac{1}{6}$ 、50

(2) 次の中で自然数に○を付けてください。
-0.4、0、2、-500、 $\sqrt{2}$

(3) -25は何数ですか？
答え：整数

(支援)

- ・学習プリントの「例えば」を示して、共通点を見付けるよう声掛けをした。

(結果)

- ・学習プリントに、自然数とは「プラスの数」、整数とは「0とプラスとマイナスが入る」と記述しており、自然数・整数についての理解ができた。
- ・具体的な数を先に示しておくことで、言語理解の弱さを補う支援となった。

3. 結果 (2) 児童生徒にとっての成果

ポイント

① 移行すると符号が変わる。(＋は－に、－は＋に)

② 係数とはxやyなどの記号の前についている数字のこと。

(2xの係数は? 2)

(1) $x + 3 = -3x$ を解きなさい。

$x + 3x = -3$...左辺にxの項をまとめ、右辺に数字をもってくる

$4x = -3$...右辺は右辺、左辺は左辺で計算

$\frac{1}{4} \times 4x = \frac{1}{4} \times -3$...xの係数で右辺を割る $\rightarrow x = -\frac{3}{4}$

の解にする

(2) $2x - 4 = -x$ を解きなさい。

$2x + x = 4$

$3x = 4$

$x = \frac{4}{3}$

(3) $3x - 1 = 2x$ を解きなさい。

$3x - 2x = 1$

$x = 1$

(支援)

- ・Bの手が止まった場面で、「xは1xのことだよ」と伝えた。

(結果)

- ・xは1xのことであると分かると、すんなりと問題を解くことが出来た。
- ・端的なことばで伝えることによって、言語理解の弱さを補う支援となった。

3. 結果 (3) 持続可能な運営体制

持続可能な運営体制として
その内容と方法を開発すること

- ・**①**運営スタッフによる自己評価
- ・**②**実働スタッフに対するアンケート
- ・**③**参加の保護者及び子どもに対するアンケート

①運営スタッフによる自己評価

佐々木 (2012)の観点による運営実態の自己評価

佐々木全 (2012):発達障害児(者)に対する「本人活動」における運営実態—岩手県内8グループを対象としたアンケート調査から—, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 8, 27-41.

運営状況に関する評価△ △＝運営上の課題	Q安定的な実践ができているか Q活動の目的は実現できているか	Aやや不安 ・参加者、実働スタッフの不足 ・スタッフは活動時3名必要、現状は2名 A概ねできている
●人的環境		
①中核スタッフ △	やや不十分。2名。3名ほしい	
②実働スタッフ △	やや不十分。登録12名（岩手大学学生）。ただし活動時2名であり実働面で不足。	
③スタッフの連携△	運営上の業務分担、情報共有、活動手続き等において齟齬がある。	
●経営的環境		
①経費	保険代金のみ。ただし参加者が少なければ赤字になるリスクもある。	
●実働的環境		
①会場、使用物品	会場確保に心理的負担、ただし、無料でありありがたい。	
②活動内容△	学習が成立しないことがある。学習以外の活動の企画に苦心。	

②実働スタッフに対するアンケート

(N=5 記述回答を質的に分析した。)

〈安定した活動のための要件〉

【参加者の恒常的確保の必要】

- ・子どもが継続的に参加できること。・継続的に参加する子どもが増えること。
- ・参加する子どもが増えること。
- ・子どもたちが気軽に集まって一緒に活動する居場所になれたらいいのかなと思います。
- ・参加予定の子どもが1人だった場合に、その子どもが直前で欠席になると活動自体が急になくなってしまうこと。
- ・参加する子どもが少ないため。
- ・子どもの参加状況がまばらなこと。

【実働スタッフの恒常的確保の必要】

- ・スタッフと子どもをもっと充実させるべきだと思う。
- ・学生が安定して参加できていないことが心配な点です。
- ・私自身、継続して参加できていなくて申し訳ないです。
- ・日程が合わず参加が少なくなってしまったこと。
- ・就職するので、続けられるか分からないため。
- ・学生が1人の時があったが、それで大丈夫だろうか。
- ・私自身がなかなか参加出来ている状況ではないため。
- ・思ったように参加できていないため。
- ・夏の活動時に子どもたちに「また遊ぼうね」と言われたのに対して「うん」と答えてしまったのが、嘘をついてしまったようで気がかりです。子どもたちが気にしていないといいなと思っています。
- ・あまり参加ができておらず、あえりあの主体となって動いてくださっている方々への負担が大きくなってしまっているのではないかと、申し訳なさを感じています。

【活動内容や方法の明確化の必要】

- ・活動時間に何を行えば良・そのためには活動内容をより子どものニーズに合ったものにすることが必要であると思う。
- ・プログラム（活動内容のこと：分析者注）が一貫せず、子どもが学習に向かわず好きに遊ぶ場になってしまったこと。
- ・宿題をやる時間になかなか宿題に取り組まず、遊び続けてしまう子どもがいた。
- ・子どもが学習道具を持ってこない時に何を使って学習時間を過ごすか。

②実働スタッフに対するアンケート

(N=5 記述回答を質的に分析した。)

〈安定した活動のための要件〉

【参加者の恒常的確保の必要】

【実働スタッフの恒常的確保の必要】

【活動内容や方法の明確化の必要】

〈活動内容や方法の明確化のための方策〉

【活動内容種目のアイデア】

- ・複数人で遊べるボードゲーム
- ・制作活動
- ・料理や創作など体験活動
- ・料理教室とか。固めるだけのプリンとかなら刃物も火も使わないから検討可能かと思います

〈実働スタッフの恒常化(参加定着)要件〉

【やりがい】

- ・継続的に参加する子どもが増え、やりがいが増えること。
- ・参加する子どもが少ないので、自分が参加しなくても良いと感じてしまうから。
- ・子どもにとって有意義な時間になっているかなど、成果が見えづらいため。
- ・活動後にミーティングをするなど、情報共有を行い、成果を確認すること。

【開催日の恒常化】

- ・活動する曜日が定まっている方が子どもも学生も参加しやすいと思う。いかわかること。
- ・日程の調整(長期休みだと学生が参加しやすい?)
- ・活動する曜日が定まっている方が子どもも学生も参加しやすいと思う。

〈実働スタッフ確保のための方策〉

【募集方法】

- ・大学の講義等で提示する。
- ・スタッフの募集(教育学部とか心理の人とか?後輩増やしたい)

【組織化】

- ・サークル化する

まとめ:

- ・【参加者の恒常的確保の必要】に関して、参加要件への言及はなかった。
- ・【活動内容や方法の明確化の必要】に関して、参加者への対応などの悩みが挙げられていたが、それに対する方策の言及はなく、【活動種目】のアイデアが挙げられるにとどまった。
- ・【実働スタッフの恒常的確保の必要】に関して〈実働スタッフの参加要件〉と〈実働スタッフ確保のための方策〉が挙げられたが、前者の整備こそ重要であろう。ただし、「継続的に参加する子どもが増え、やりがいが増えること」との回答があったが、参加者の確保とスタッフの確保は、相互に依存し合っている面もあり、同時進行で整備する必要があるのかもしれない

③参加の保護者に対するアンケート

(N=5 記述回答を質的に分析した。)

〈活動に対する要望〉

【開催】

- ・出来れば定期的に活動をしてくれればと思います。
- ・開催の回数はちょうどいいと思っています（賛同、分析者：注）

【活動内容】

- ・勉強だけではない、なにかゲームなどができる場所。あとはスポーツなど。

【対応】

- ・携わってくれる学生の皆さんも楽しんで参加して、ますます楽しい集まりにしてほしい
- ・先日、参加日前日に急きょ不参加になってしまい、メールにて連絡しましたが、伝わったかなと不安でした 面倒でも緊急連絡先の案内は必要かと思っています（苦情、分析者：注）

【会場】

- ・平日は場所が離れているため行けないから
- ・会場に歩いて参加できる（賛同、分析者：注）

③参加の保護者に対するアンケート

〈活動の成果〉

【対人交流】

- ・子どもが、同級生や年の近い子達だけで遊ぶのが不得意で、大学生の方が近くにいてくれると安心するみたいです。
- ・異年代交流
- ・子供と先生方のふれあいの場所
- ・色々な体験や人とのコミュニケーションを取れる場。

【学習環境】

- ・勉強できる環境
- ・宿題等もわかりやすく教えて貰える、ちゃんと直して来れるので満足です。
- ・学校では先生に質問出来ない事も気軽に聞けるような場。
- ・勉強をわかりやすく教えてくれる。

【楽しみ】

- | | |
|--------------------|---------------|
| ・子どもが楽しく参加しているので | ・子供がいきたいと言うため |
| ・子供がいつも楽しいと言ってるから。 | ・楽しい。 |
| ・楽しんで参加すること | ・子どもが楽しく過ごすこと |
| ・子供が楽しいと言ってるので、 | |

③参加の保護者に対するアンケート

〈保護者にとっての活動のメリット〉

【子どもをあずけることに対する安心】

- ・子ども一人に対応する人数が多くて安心

【情緒的、時間的な価値】

- ・子どもと離れられるので気持ちが楽になり、活動後に優しくできる
- ・働いている親もあり、土日の活動が増えればいいなと思います。

参考

子ども延べ10名に5件法で次の項目を尋ねたところいずれも平均4.0以上の肯定的評価であった。（「活動が楽しかった」「仲間や先生と仲良くできた」「今日来てよかった」「また来たいか」）

まとめ：

- ・参加している子ども、利用している保護者からは賛同を得ている。少数の参加であってもその支援ニーズを確実に満たすことが肝要である。
- ・活動内容についてレパトリーを求める回答があったり、活動の成果やメリットには、本活動自体の目的に即した内容とそうではないもの、副作用として得られたもの〈保護者にとっての活動のメリット〉が挙げられた。これらについて、本活動自体のアイデンティティに関わるものだけに、運営に反映するか否かの慎重な検討が必要である。

4. 考察

児童生徒にとって
の成果を検証し、
実践的な意義を明
らかにすること

・ 子どもの認知の特性に応じた支援の有用性を確認することができた。それによって承認欲求が満たされ、学習への取組もスムーズになった。このようなことが居場所となるための要件だと考えられた。

・ このようなことが居場所となるための要件だと考えられた。

持続可能な運営体
制としてその内容
と方法を開発する
こと

- ・ 成果 少人数の参加者であるが、着実にニーズは満たしている。そもそも多様な選択肢があるなかで本活動を選択した参加者である。大切にしたい。
- ・ 課題 安定的な運営のための人的環境のマネジメントと活動自体のブラッシュアップを要する。